

社会に開かれた大学博物館とは 京都精華大学と京都国際マンガミュージアム



山田 奨治 国際日本文化研究センター教授

やまだ しょうじ●1963年大阪府生まれ。88年筑波大学大学院修士課程医科学研究科修了。98年京都大学博士（工学）。96年国際日本文化研究センター助教授。准教授を経て2011年4月より現職。専門分野は情報学、文化交流史。著書に『東京ブギウギと鈴木大拙』（2015年 人文書院、第31回ヨゼフ・ロゲンドルフ賞受賞）、編著に『文化としてのテレビ・コマーシャル』（2007年 世界思想社）、『日本の著作権はなぜもっと厳しくなるのか』（2016年 人文書院）など。

圧倒的な「マンガの壁」

この壁はマンガ本でできている。そういいたいくなるような光景が広がっている。開架5万冊のマンガ本を自由に手に取り、館内のどこでも好きな場所で読み、おしゃべりができる。休日にはコスプレを楽しむ人もいる。2016年に開館10周年を迎えた京都国際マンガミュージアム（以後、マンガミュージアム）である。京都精華大学と京都市の共同事業として、閉校になった元京都市立龍池小学校の校舎を改築し、日本初の総合マンガ専門ミュージアムに生まれ変わった施設だ。国・自治体・大学・地域社会・出版社・マンガ家・市民など、さまざまな主体がマンガミュージアムを支えていて、公民協働の成功例としても注目が集まっている。

私は同じ京都市内にある学術機関で、マンガ・アニメ文化も視野に入れた研究をしている。マンガミュージアムとは創設の当初から公的・私的なご縁があり、この研究員たちとは、互いの研究会に呼んだり呼ばれたりの間柄である。そうしたこれまでの交流を踏まえつつ、マンガミュージアムでの「学びの未来」を探っていきたい。



マンガミュージアムの廊下の壁は、1階から3階までコミックで埋め尽くされている

ミュージアムという選択

「ミュージアム」の語にびたりとはまる日本語はない。この語は、日本では博物館とも美術館とも訳されている。それとは別に図書館という制度もある。大英図書館が大英博物館のなかにあったことを思えば、ミュージアムと図書館もかつてはずっと近い存在だった。マンガ博物館でもマンガ美術館でもマンガ図書館でもない、マンガミュージアムという名称を選

択したことで、制度的な境界がうまくぼかされている¹⁾。結果として、「博物館ではない」「美術館ではない」「図書館ではない」といったネガティブな自己規定がなくなり、何でもありの自由が生まれている。ここはマンガ文化の博物館であり、マンガをアートとして体感できる美術館であり、マンガを読むことができる図書館でもある。そうした曖昧さが、マンガというメディアに特有な「学び」にふさわしい環境をつくっている。

ここがレファレンスされて、全国各地にマンガ・アニメ関連の文化施設ができています。それら後発組に押されて、マンガミュージアムの先進性が脅かされてはいないのだろうか。研究員の伊藤遊氏にその質問をまずぶつけてみた。

ここと他のマンガ関連施設との違いは2つあって、1つは物理的に広いこと。こういうものを作ろうという目的があって作ったものではなく、学校を無理やりミュージアムにしたので、すごく変なところに遊びの場所ができたり、意味のない空間がいっぱいあります。そういう場所が新しい使い方を生む可能性を担保してくれています。2つめはマンガ学部のある京都精華大学が運営していること。他のほとんどの施設には専門的なスタッフがいません。専門家がいないと館内のコンテンツを変えることができず、アーカイブを蓄積していこうという発想も乏しくなります。

確かに、館内は広々としているのに、あちらこちらに窪んだ空間があって、そこでマンガを読む人がいる。全体的な広さと局所的な狭さが程よく混ざっていて、それ自体がマンガの世界を象徴しているようにも思える。

2つめの点は、マンガミュージアムのレベルを維持するうえでかなり重要だ。マンガ研究を専門とする研究員が常駐し、京都精華大学の教授たちが、専門性の高いセミナーやシンポジウムを館内で開いている。世界中から来る研究者がマンガミュージアムを見て帰る、その宣伝効果も大きい。展示企画や資料のアーカイブ化でも、大学での研究蓄積が活かされている。

お客さんがルールをつくる

開館から10年もたつと、創設時の熱量が減ってしまうのが世の常だ。初期の理想が失われていることはないのだら

うか。また10年の実践を通して、よりよい方向に変わったことはあるのだろうか。こうしたことについて、マンガミュージアムの創設準備から関わってきた伊藤氏が答えてくれた。

伊藤氏によると、創設時にスタッフで話し合っ、最初から規則で固めることはやめて、ルールは来館者につくってもらうという原則を立てたそう。ミュージアムを規則に縛られない開かれた空間にして、来館者の行動を観察し、面白そうなのが見えたらそれをルール化する戦略だ。

例えば今、グラウンドで寝っころがってマンガを読んでいる人たちがいます。けれども、あれも、こちらからマンガを持って行って、横になって読んでいいんですよ、と勧めたわけではありません。じっと観察してたら、そういうことをするお客さんが出てきて、そのお客さんを見てほかの人をもってなって、そして風景が勝手にできていった感じですね。

よそのマンガ図書館では、図書館的な利用以外のことをすると怒られるんですよ。例えばおしゃべりをするとか、そこで受験勉強してもいけないのです。マンガを読むっていうことをしない人は怒られるわけです。そういう規定されたものを作らないようにして、ここはマンガの読み方、楽しみ方をお客さんと一緒に作れる場所にできたらいい、というコンセプトを掲げました。

このコンセプトは大成功だった。来館者はそれぞれの気に入った場所で、マンガを読んだり昼寝をしたりしている。館内のどこかに自分の快適な場所がある、そんな空間であることが年間30万人、累計300万人の来館者を呼び込んでいる。

伊藤氏は、博物館学や建築史を専門とする研究者らと、来館者の動態調査も行っている。それによると、マンガミュージアムをマンガ図書館として利用している人が約6割、博物館・美術館的な利用者が約4割だった。ところが、数パーセントの人はマンガとは関係のないことをするために入館料を支払っていた。昼寝をするだけ、おしゃべりをするだけ、ケータイをいじるだけなどだ。

統計的な検定からは漏れ落ちてしまうような、この例外的な数パーセントの客層が大切だと伊藤氏はいう。この訳のわからない数パーセントを生むバッファのあることが、マンガ

ミュージアムを特別なものになっている。

近代的な博物館・美術館や図書館は、ほっておくとなくなってしまうような文化を保存する役割がある。それによって、自分たちの文化がどういうものなのかを自己規定し、ひいては国民を束ねる権力装置にもなっている。厳しくいえば、マンガミュージアムもその例外ではない。ところが、マンガは国民文化だ、クールジャパンだといった大上段な構えをスルーするかのように、昼寝やスマホ／ケータイいじりのような日常の時間を、ここで過ごす来館者がいる。彼らこそが、ポピュラー・カルチャーについてのミュージアムのあり方を考えさせてくれる人々なのだ。

作家と出版社が認めてくれた

そうした創設時からの一貫したコンセプトがある一方で、この10年間で大きく変わったことはないのか。その点を主に展示を担当している研究員の倉持佳代子氏に聞いてみた。

作家さんと出版社さんの目が10年前とは明らかに違ってきました。最初はマンガをタダで読ませることにずいぶん抵抗がありました。マンガをミュージアムで展示？ というような反応だったのが、今では作家さんや出版社さんのほうから、うちでやってほしいと言われるようになっています。

かつて、展示は自主企画で回していたが、ここ数年は作家や出版社からの持ち込み企画が多くなっている。年間10本弱の企画展の大半は持ち込みや共同企画もので、完全な自主企画のものは年に1本だ。原画を無料で貸すのでキュレーションをしてほしいという依頼が多く、それらをさばききれなくなっている実情もある。今では作家・出版社との関係を壊さないようにしながら、企画を断ることに苦労しているそうだ。

出版社はどれも次号の雑誌を出すことに精いっぱい、開館した頃は「企画展に原画を出してください」と言うと、余計な仕事が増えたぐらいに思われていた。ところが、今は逆に「新刊を出すので展示をやりましょう」と言う編集者も増えてきたという。マンガミュージアムからは研究知見や情報の蓄積を業界にフィードバックして、Win-Winの関係を築くことができる。作品そのものやそれに関わる情報を蓄積して、

後世に残すことが大切だと関係者が思い始めてもいる。そして何よりも、マンガミュージアムで展示されることが、作家や出版社のステータスを高めることになると思われるまでになってきた。

企画力も健在

外部から持ち込みの企画が増えているとなると、あたかも貸し展示場ようになってしまい、マンガミュージアム独自の視点を示す企画力がそがれはしないかと心配になる。しかし過去の展示を見れば、そのような心配は無用のようだ。

独自企画による近年の展示の中では、2015年夏にあった「マンガと戦争展」は図抜けたものだった。展示では「原爆」「特攻」「満州」「マンガの役割」「沖縄」「戦中派の声」の6つの視点を出し、それぞれについて2軸を立てて4つの象限に作品を位置づけた。例えば「原爆」ならば、「戦争体験者による―戦後世代による」と「伝承―物語」の軸がある。「戦争体験者による伝承」は中沢啓治の『はだしのゲン』、「戦争体験者による物語」は辰巳ヨシヒロの『地獄』、「戦後世代による伝承」は西岡由香の『夏の残像』、そして「戦後世代による物語」はこの史代の『夕風の街』である。

ふだんマンガを読むほうではないわたしは、この展示を通して、この史代のことを初めて意識した。彼女のその後の大ブレイクを見るにつけ、自分がマンガミュージアムでキュレーションされたのだなと実感する。

伊藤氏と倉持氏に聞くと、知る人ぞ知るマンガ家や、今の人はまったく関心がない戦前の風刺マンガ家や、海外のマンガ家といったジャンルに、積極的に取り組んでいる。また、研究的な展示とエンターテインメント寄りの展示のバランスにも配慮をしている。学術性の高さも大事だが、集客とグッズ収益が見込める展示をすることも、現実問題として重要なのだ。

アクティブ・ラーニングの実践

さて、本特集の焦点であるアクティブ・ラーニング（以後、AL）への取り組みは、マンガミュージアムではどうなっているのだろうか？ ALの語が日本で注目されたのは、2017年3月に公示された新学習指導要領が審議されていたときだった。旧来の教え込み式の座学中心の授業では、知識

の応用力が身につかないのではないか。日本の子どもたちがその方面に弱いことが、学力の国際比較テストにはっきりと表れているのではないか。そうした議論の中で注目されたのが学習者の能動的な学びとしてのALだった²⁾。

ALで重要なのは、学習者が新たな発見をし、すでに持っている知識とつなぎ、さらなる学習課題を自ら見つけることにある。ミュージアムでいうならば、そうした方向に来館者を誘うように情報を配置することだろう。

ところが、「マンガの壁」を巡ってみれば、作品の意図的な配置をあえてしていないことがわかる。1階は少年マンガ、2階は少女マンガ、3階は青年マンガで、それぞれの階は作家の50音順に本が並んでいる。目当ての作家がはっきりしている場合は探しやすいが、作家と作家の影響関係や年代、発表媒体の違いなどは見えてこない。

館内で何を讀んだらいいかわからないという人には、メインギャラリーを見るように勧めている。そこには、いわゆる名作マンガが発表年ごとに並んでいる。メインギャラリーにある作品には、好みの差はあってもハズレは少ない。倉持氏は次のように言う。

メインギャラリーのお客さんを見ていると、「これ、讀んだことがある!」という本の選び方をしていますね。それは実は展示でも同じで、来館者の人って自分がマンガをよく讀んでいた時代の展示をすごく一生懸命に見るんです。

知らない作品を讀むよりも、かつて讀んだマンガをもう1回手に取る人が、かなり多い印象があるそうだ。グループでノ

スタルジーを喚起しながら、話が膨らむという光景がマンガミュージアムではよく見られる。

たぶん多くの人にとって一番関心があるのは、自分のことなんですね。展示テクニックとして意識していることですが、例えば、自分の出身と同じ県の作家さんだとか、自分が生まれた年に描かれたマンガとか、そういう自分と関係するフックをたくさんつくっておくと、その扉を開けてくれるという傾向は、たぶんありますね(伊藤氏)。

入り口としてそれを用意しておいて、そこから新しい扉を開けてもらうような工夫は開架の本にせよ、展示にせよ、共通していることかな(倉持氏)。

また、成人向けマークが付いていなければ開架にしているので、ややアダルトな作品を小学生が讀んでも注意したりはしない。「背伸びすれば手に入る反社会的・反道徳的なものは、むしろ教育的」だと伊藤氏は言う。なるほど、そういうALもあってよい。

市民がマンガを学ぶ意義

マンガミュージアムでのALは、展示や開架図書よりもむしろ、開館時から続けている各種の開かれたワークショップにある。来館者がふらっと立ち寄れるマンガの描き方教室、マンガ家のアシスタント体験、プロによる有料の個別指導など、さまざまな種類のワークショップを開催している。これらは、実際に学習者が自分で手を動かすという意味で、紛れもないALといえるだろう。

ところで、プロを目指しているわけでもない一般の市民がマンガの描き方を学ぶことに、どんな意義があるのだろうか?

マンガは文芸や美術とは異なり、独自かつ高度に発達した記号体系でもある。マンガの読者はその記号体系を意識せずに、経験的に習得している。マンガを実際に描いてみれば、それが記号の集まりであることを改めて発見し、理解が深まる。そうした市民が増えると、それがマンガ文化の発展につながる。伊藤氏は言う。

公立図書館や学校図書館にどんなマンガを入れたらいい



2階のメインギャラリーには、名作マンガが年代順に並ぶ



1階には常設のワークショップがあり、来館者が気軽に立ち寄ることができる

かという相談をよく受けるんですが、活字本のほうがマンガより上位にあって、マンガはそこに行くための入り口だという発想が、司書さんや先生方にはあるんです。活字を読むこととマンガを読むことはリテラシーが全然違うことに、まず気づいてもらいたい。マンガミュージアムの使命として、マンガのリテラシーを高めることで、マンガそれ自体の深さがわかる人を増やしたいのです。学校の先生は「『ベルばら』を入れるのはいいですか?」と聞きます。でも『ベルばら』の素晴らしさは、フランス革命の情報が載っていることだけじゃないんです。

かつては小学館や学研の学年誌が、子どもにとってマンガ・リテラシーを身につける「道場」になっていた。それらが相次いで休刊になったことで、マンガを読まずに育つ子どもが増えているという。それが将来のマンガ産業に与えるインパクトは、小さくないかもしれない。

マンガミュージアムがこれから力を入れようとしているのは、シニア層の生涯学習としてのワークショップだ。絵手紙を楽しむシニアはいるが、マンガとなると絵手紙よりも一段低いものと思われている。そういう意識を変えられないかと倉持氏は言う。

テストケースとして、マンガを描いたことのない70歳くらいの方10人に、家族をテーマにした4コママンガを描いてもらいました。描き出すまでが難しそうでしたが、マンガは実は絵のうまい下手は関係なく描けます。つまり極端に言えば、棒人間の絵でもマンガとしては成り立ちますので。そうした点を伝えたら、マンガに対するハードルも少し下がったみたいで、

最終的には皆さんとても良い作品を完成させていました。「ぼけ防止にええわあ」「帰ったら孫に見せるわ」という声が聞け、家族についてのマンガを描くことは、家族のコミュニケーション・ツールにもなりそうです。

いまは共働きの両親に代わって、祖父母が孫の面倒を見ている家庭が少なくない。祖父母から孫へと、マンガを描く面白さが伝われば、との思いもある。マンガミュージアムのALは、マンガ産業・マンガ文化の未来を見据えている。

公民協働

マンガミュージアムは、公民協働の理念のもとに設立されたことでも知られている。公民協働とは、行政と民間が連携して公共施設の整備や維持・管理をすることだ。マンガミュージアムの場合、土地と建物を京都市が無償で貸与している。また設立から10年間は文部科学省の支援も受けていたし、現在も国の研究プロジェクトを請け負っている。入館料などの自己収入もあるが、予算の多くは京都精華大学が出している。そして公民協働で何よりも大事なものは、地元の理解と協力である。

設立構想が持ち上がったとき、地元の元龍池学区から大きな反対運動が起こった。マンガの施設などができたら、訳のわからない人たちが近所をウロウロするようにならないか、といった偏見もあったことだろう。洛中に根強く残る排他的な意識もある土地柄だ。

地元の理解を得るために、当時の河合隼雄文化庁長官によるマンガの重要性についての講演会を2回催した。京都精華大学マンガ学部の授業で、龍池小学校の歴史をテーマにしたマンガ制作の課題を出し、学生が住民にインタビューするなどして、大学と地元とが親交を深めた。また、館内に地域のコミュニティ・センターになる部屋をつくり、子育てサロンなどに利用されている。

そうした努力が実って、いまではマンガミュージアムは完全に地域社会に溶け込んでいる。年間30万人の来場者が賑わいをもたらしているし、マンガファンが案外礼儀正しいことも理解されたようだ。現在、グラウンドに敷かれている最高クラスの人工芝は、住民から寄付されたものだ。閉館後のグラウンドでは少年野球チームが練習している。年に1度の



京都国際マンガミュージアムの外観。小学校の校舎を改築し、グラウンドには、住民から寄付された人工芝が敷かれている

元龍池学区の運動会がある日は休館日にして、マンガミュージアムの職員もチームで参加する。倉持氏によると、運動会は地元の方々とのつながりを実感するうえで、職員の「一番重要な行事」の一つなのだそうだ。

国の施策との関係では、文化庁の「メディア芸術連携促進事業」で、マンガ原画管理の研究を受託するなどしている³⁾。原画の収集や修復・保存の作業工程、コストの洗い出しを実験的に行ったもので、将来どこかにできるかもしれない本格的な原画アーカイブスのための基礎研究にもなっている。また2001年からは「原画（ダッシュ）」の試みを、京都精華大学国際マンガ研究センターとともにやっている。「原画」とは、マンガ原画を高精細にデジタル複製したものだ。原画の現状を記録するだけでなく、展示への貸し出しなど、二次利用ビジネスを開拓するものでもある。

次の10年をどう開くか

館内が広くてきれいで、商業性の高いコンテンツを扱っているのに、外部からは景気のいい施設と思われがちだが、実情はそうではない。年間の展示予算は、他の博物館・美術館での1回分よりも少ないことすらある。そんな中で工夫して、マンガミュージアムを維持する努力をしていることは、外からは感じにくい。

順調に見えるマンガミュージアムも、経営的には赤字が続いている。運営母体の京都精華大学は大きいとはいえない私立大学だし、理工系の学部がないこともあって、昨今の大学経営難の例外ではない。マンガミュージアムをこれ

からも支えていけるのだろうかと不安になる。

資料収集の予算は微々たるものだそうだが、市民からの寄贈のおかげで30万点分の収蔵庫はすでに満杯になっている。新規の寄贈はすでにお断りしていて、これからは30万冊の中身を吟味して、国内外の別の施設に再寄贈するなどして、保存の必要性がより高い資料に置き換えていく。データベースも単なるカタログではなく、来館者に示唆を与えてくれるような創発的なものを目指したいと、伊藤氏は言う。

一番の課題は、マンガ資料の専門家が社会で活躍できる仕組みを整えられるかにある。この業界全体がそうなのだが、マンガやアニメが好きだから長時間・低賃金でも、いやたとえ無給でも働いてくれる若者に頼っている。人気ドラマの名セリフを借りれば、「それは好きの搾取です」だろう。

そうした現状を改め、ノウハウを持った人間が相応の報酬で働けるようにすること、そのためにはまず自分たちが黒字にならなければと、伊藤氏も倉持氏も言う。

どれほどよい施設でも、スタッフのモチベーションだけが頼りでは続かない。マンガ資料の保存と利活用は、文化行政だけの問題と見るのではなく、業界も含めて社会全体で考えていかなければならないことだ。京都国際マンガミュージアムは、間違いなくフロント・ランナーである。大学の知を社会に開く実践者として、その活動からは今後も目を離せない。

写真：岡屋佳郎

【注】

- 1) マンガミュージアムは、法的には博物館相当施設でも図書館相当施設でもない。
- 2) ただし、新学習指導要領ではALの語は採用されず、「主体的・対話的で深い学び」を実現する手法の一つとしてALが位置づけられている。
- 3) http://mediag.jp/article/post_34318/